

地表検出器用プラスチック シンチレーターの特性調査

東京大学 宇宙線研究所 M1

水野 敦之

For the ALPACA Collaboration

共同研究者リスト



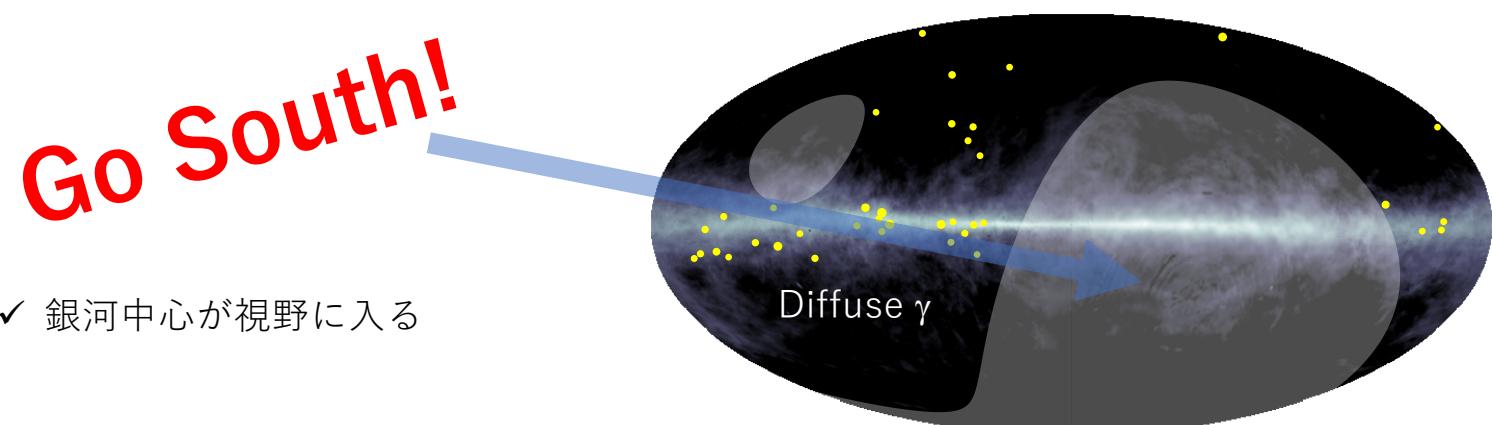
水野敦之, M. Anzorena, C. A. H. Condori^B, E. de la Fuente^C, 後藤佳歩^D, 林優希^E, 日比野欣也^F, 堀田直己^G, A. Jimenez-Meza^C, 片寄祐作^H, 加藤千尋^E, 加藤勢, 川原一輝^H, 川田和正, 川島輝能, 小井辰巳^I, 小島浩司^J, 横島拓音^H, 増田吉起^E, 松橋祥^H, 松本瑞生^E, R. Mayta^{K,L}, P. Miranda^B, 宗像一起^E, 中村佳昭, C. Nina^B, 西澤正己^M, 野口陸^H, 萩尾彰一, 大西宗博, 奥川創介^H, 大嶋晃敏^{D,I}, M. Raljevic^B, H. Rivera^B, 斎藤敏治^N, 塔隆志, 佐古崇志, 佐々木翼^F, 柴崎季哉^O, 柴田祥一^J, 塩見昌司^O, M. Subieta^B, 田島典夫^P, 鷹野和紀子^F, 瀧田正人, 多米田裕一郎^Q, 田中公一^R, R. Ticona^B, I. Toledano-Juarez^C, 土屋晴文^S, 常定芳基^{K,L}, 有働慈治^F, 碓井玲^H, 山崎勝也^I, 横江誼衡, 他 The ALPACA Collaboration

東大宇宙線研, サン・アンドレス大^B, グアダラハラ大^C, 中部大工^D, 信州大理^E, 神奈川大工^F, 宇都宮大^G, 横浜国大工^H, 中部大理工^I, 中部大天文台^J, 大阪公大理^K, 大阪公大南部研^L, 国立情報学研^M, 都立産業技術高専^N, 日本大生産工^O, 理研^P, 大阪電通大工^Q, 広島市大情^R, 原子力機構^S

Sub-PeVガンマ線天文学

★ Tibet AS γ , HAWC, LHAASO実験によるsub-PeV天文学の発展

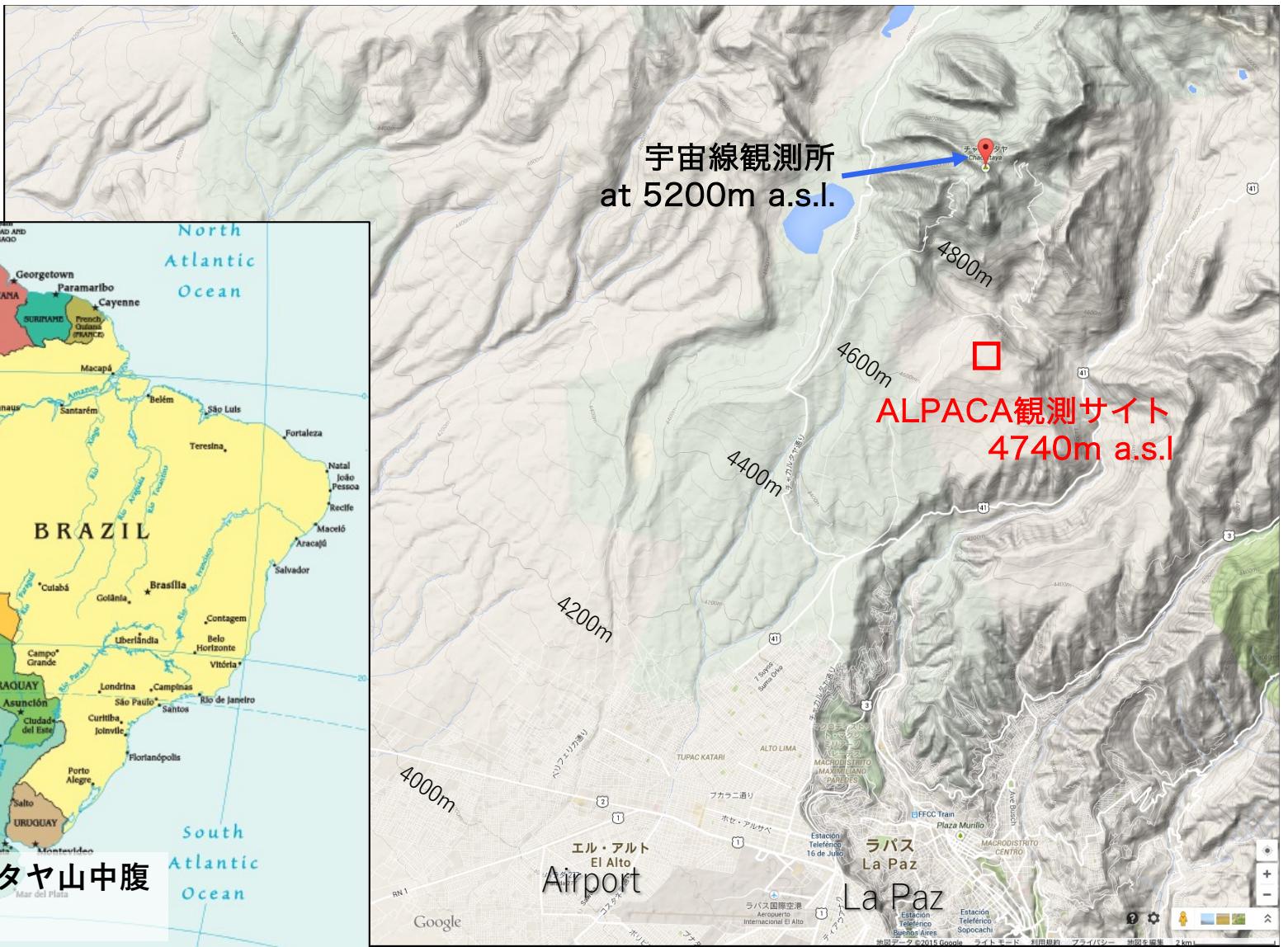
- sub-PeVガンマ線の初検出 (Crab Nebula) *Tibet AS γ , PRL (2019)*
- PeVatronの有力候補の発見 (G106.3+2.7) *Tibet AS γ , Nat. Astron. (2021)* *HAWC, ApJ (2020)*
- sub-PeV銀河面拡散ガンマ線の初検出 *Tibet AS γ , PRL (2021)*
- 40個を超えるsub-PeVガンマ線天体の検出 *LHAASO, Nature (2021)*, *ApJS (2024)*
→ 北半球の空気シャワー観測装置による成果



観測場所



南米ボリビア・チャカルタヤ山中腹
($16^{\circ} 23' S$, $68^{\circ} 08' W$)



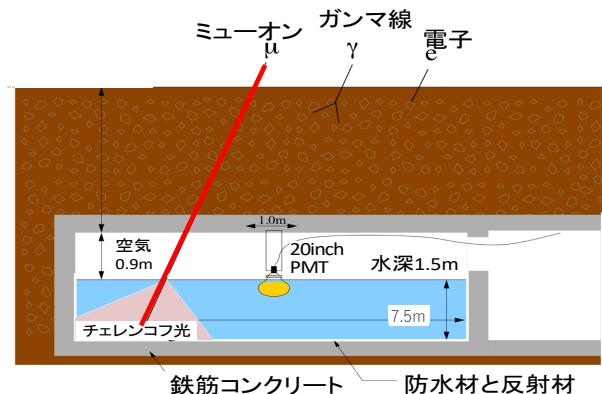
ALPACA実験の紹介

1. 空気シャワーアレイ ~83,000m²

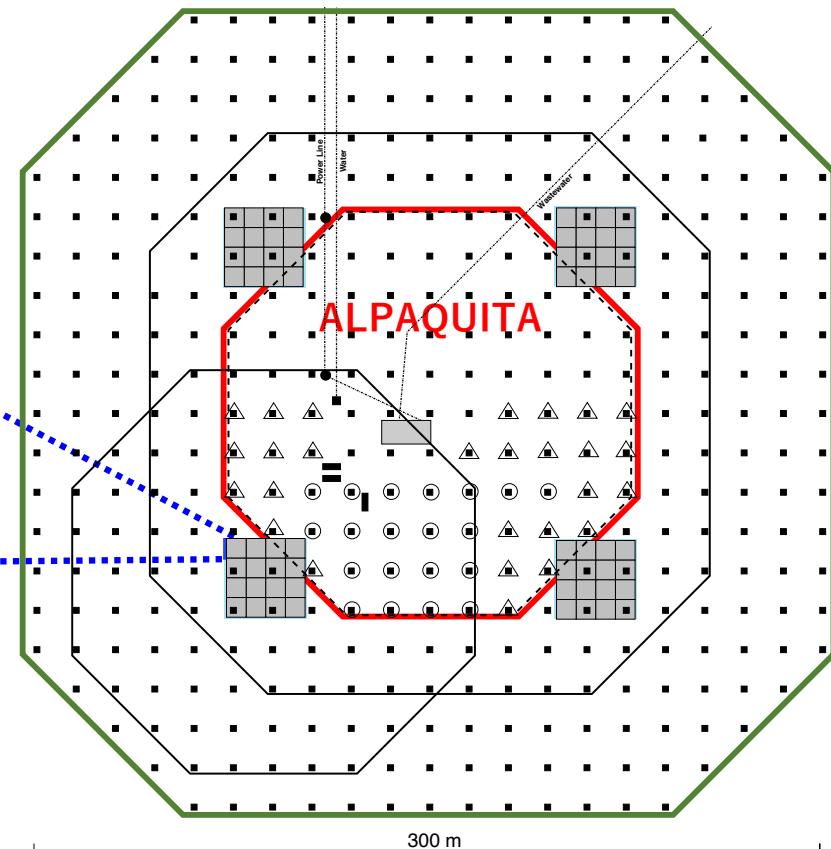
= 401 × 1m² シンチ検出器

2. 地下ミューオン検出器~900m² x4プール

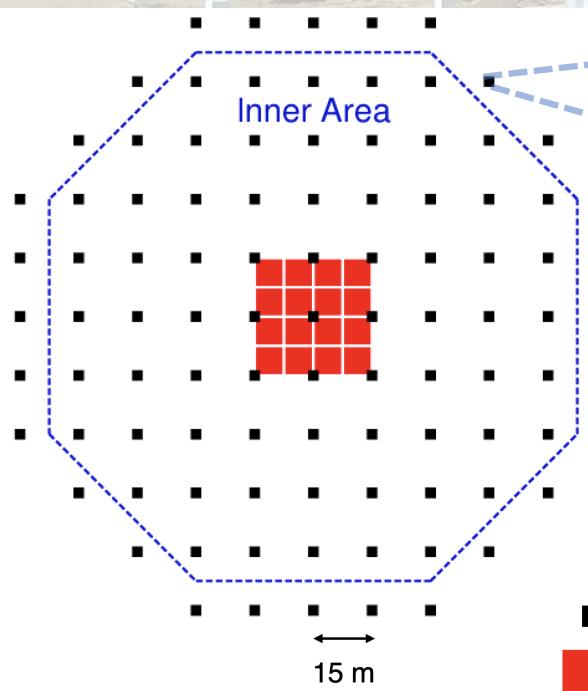
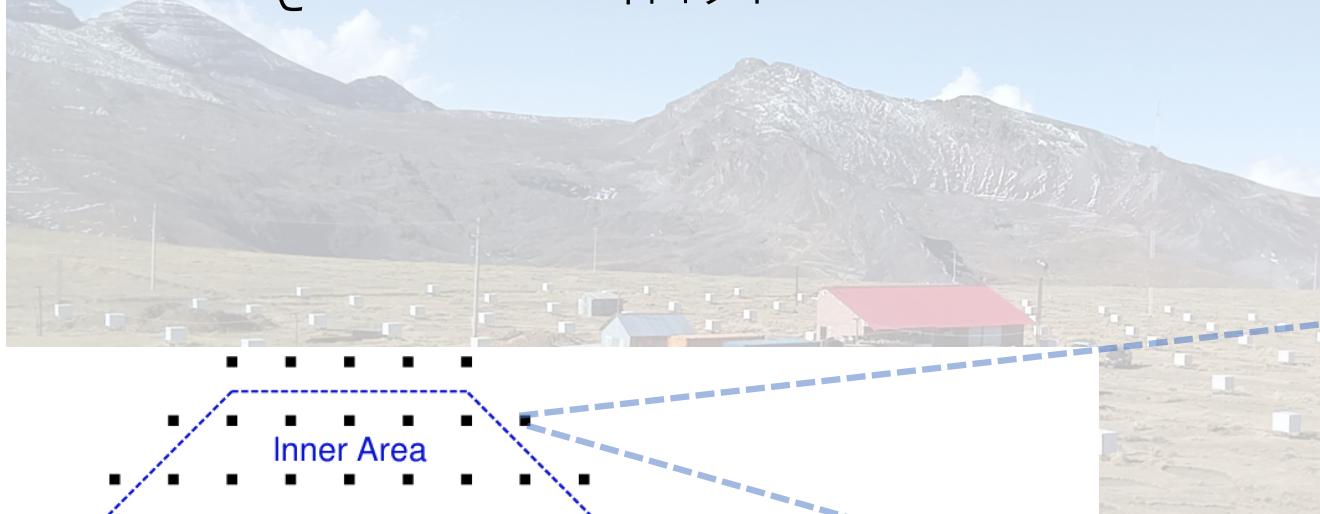
= 土被り2m, 1プール=16セル、
1セル = 56m² 水深1.5m with 20inch ϕ PMT



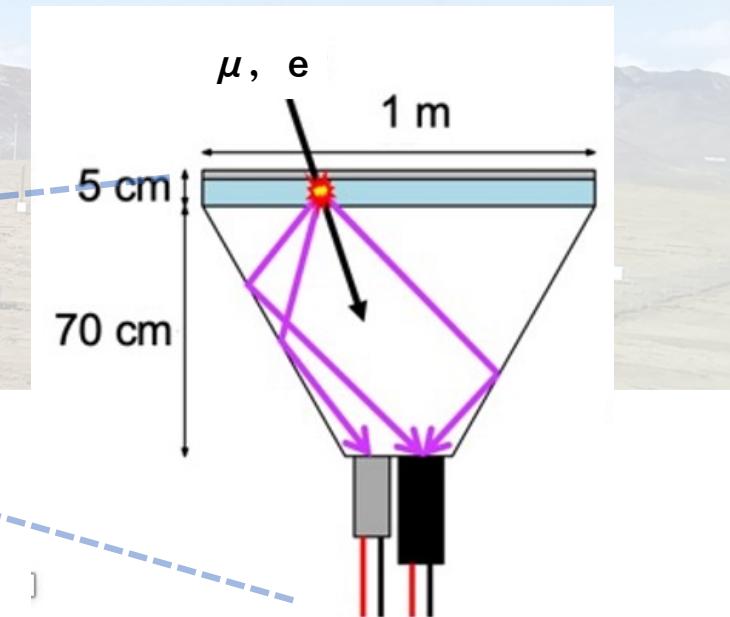
- ✓ バックグラウンド宇宙線の除去率 >99.9% @100TeV
- ✓ 広視野(~2sr)で昼夜問わず24時間観測可能
 - 角度分解能 ~0.2° @100TeV
 - エネルギー分解能 ~20%@100TeV



ALPAQUITAの紹介



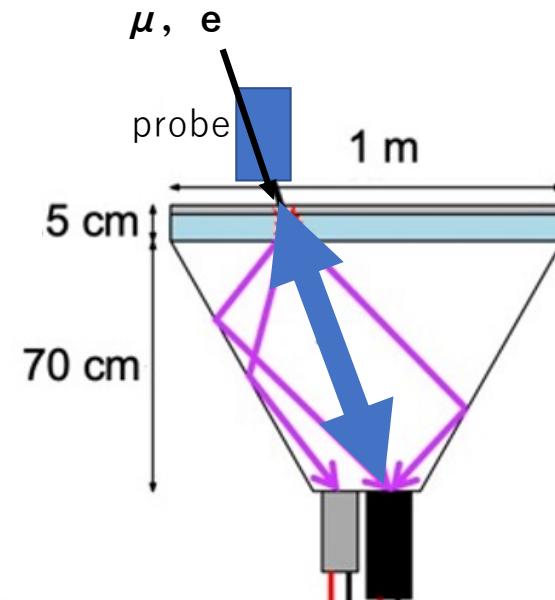
ALPAQUITA ASアレイ
→1/4 ALPACA ASアレイ
97台 総面積: $18,450\text{m}^2$



Motivation

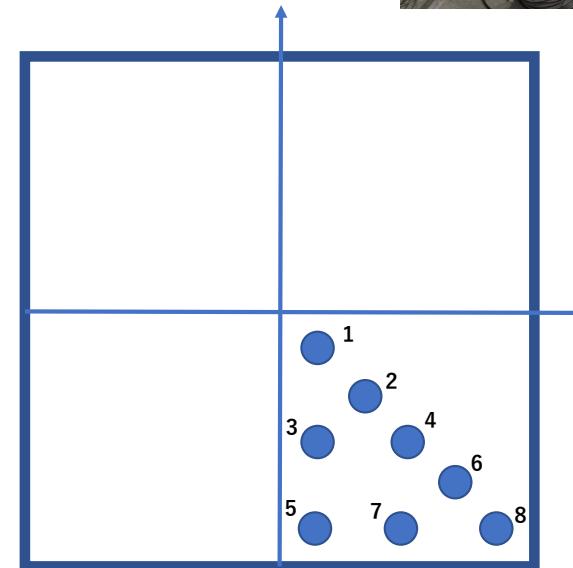
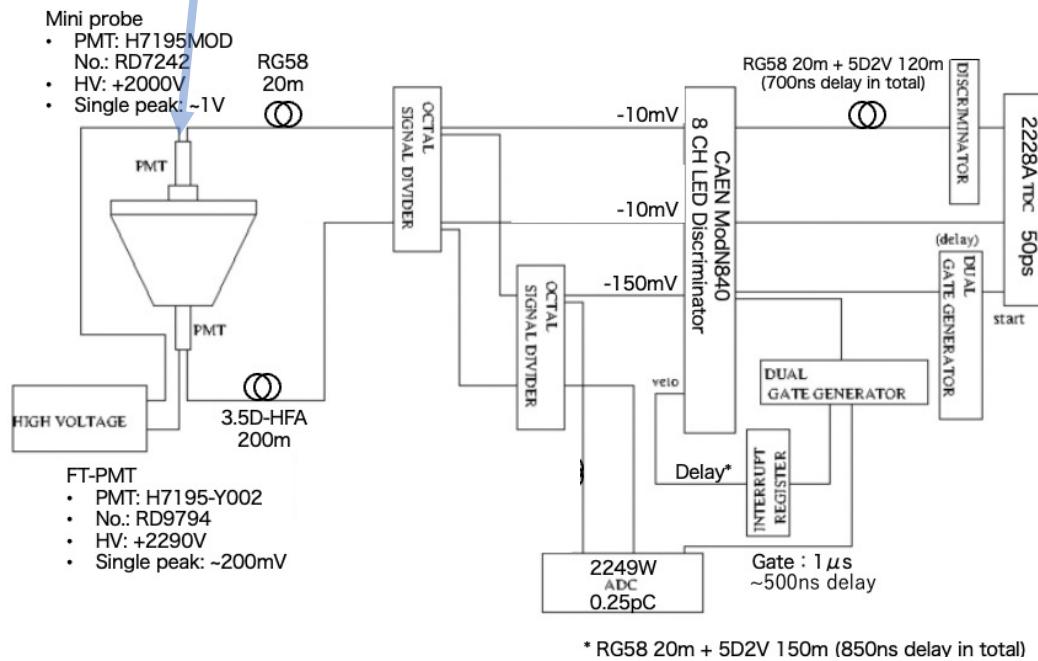
- ✓ 50cm*50cm*5cm シンチレーター ($\times 4$ 枚)におけるPMT信号の発光位置依存性が予想される
- ✓ シンチレーター・容器・PMTを通しての発光量（電荷量）・
信号の遅れ・信号立ち上がり時間の揺らぎ（t.t.s. = transit time spread）の
位置依存性の測定→モンテカルロシミュレーション（MC）に考慮
- ✓ 実験データとMCの比較

外部トリガーシンチレーター（probe）側の
PMTが発光してからBOX側のPMTが発光する
までの時間差分布の幅をt.t.s.とする



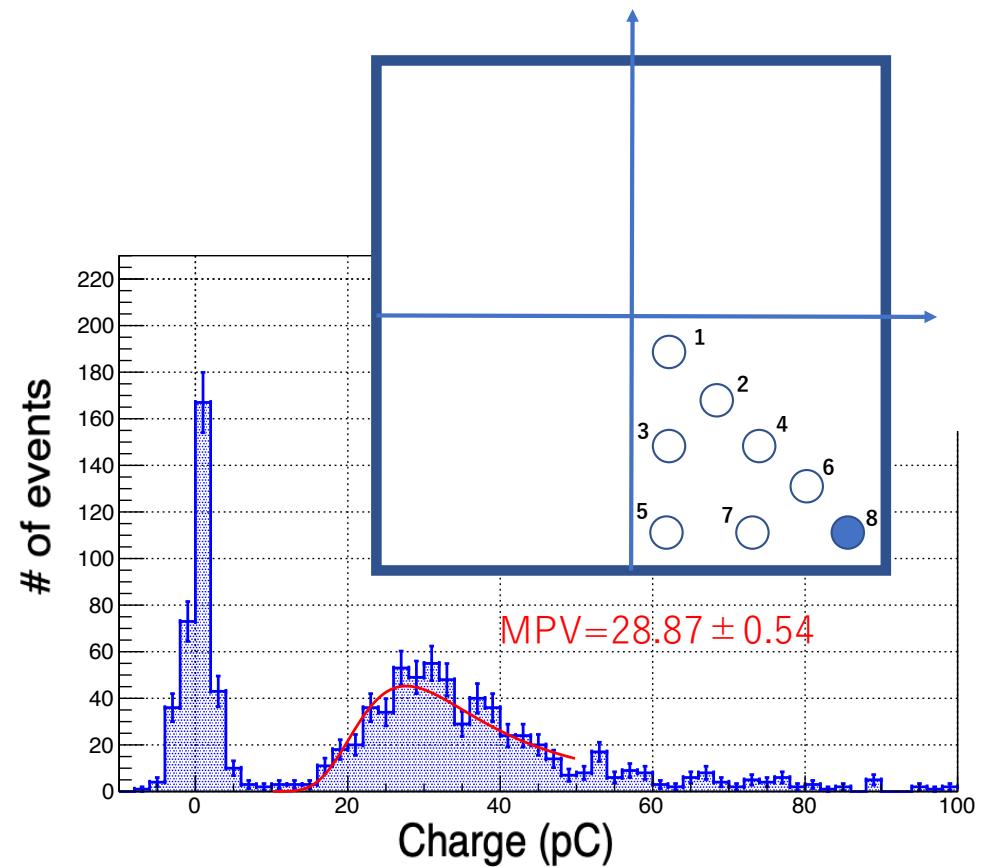
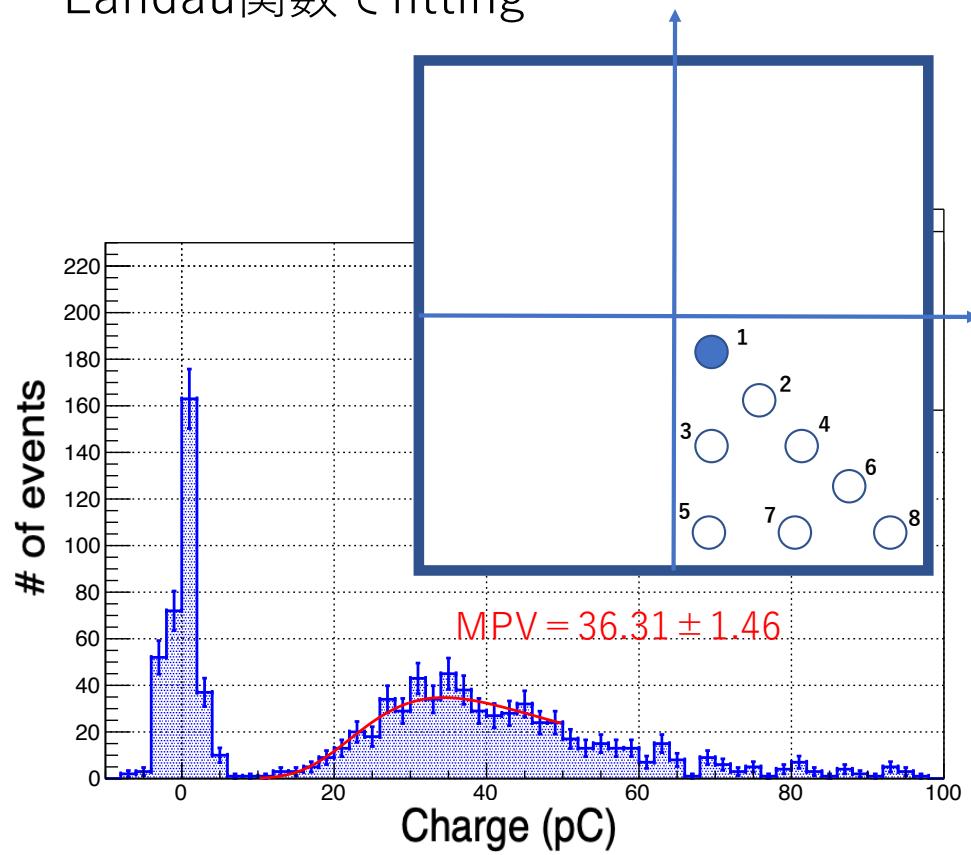
Experimental setup

- ✓ ALPAQUITAのシンチレーター・PMT・BOXを用いて宇宙線研で測定
- ✓ 1m²検出器の上に置いた
- probe検出器 (2inch PMT+2inch ϕ シンチレーター) でトリガー
- ✓ 8箇所でADC, TDCの値を記録
- ✓ シンチレーターは2枚測定



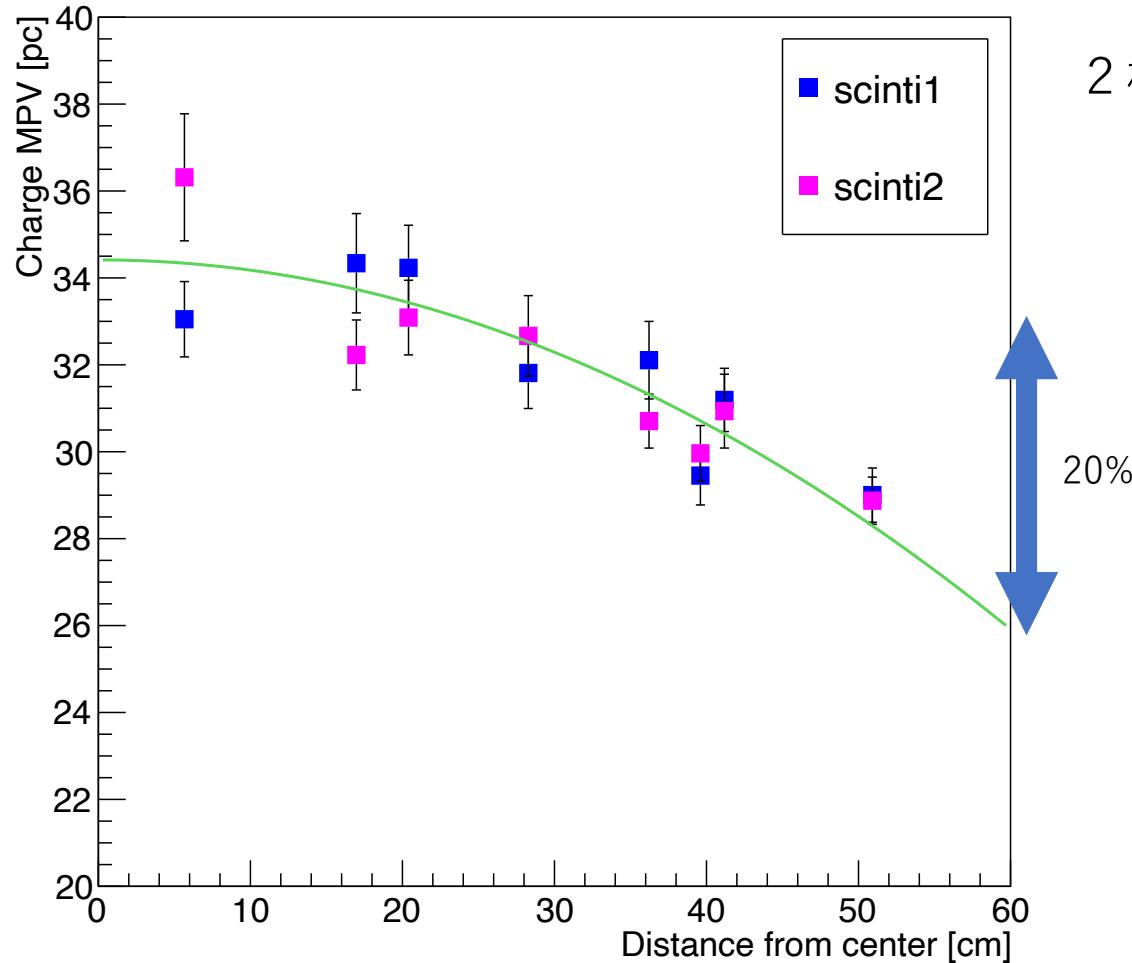
各位置における電荷量の測定

Landau関数でfitting



1 (中心付近) と 8 (角付近) の場所を比較すると 20 % 程の差が見られた

電荷量の位置依存性



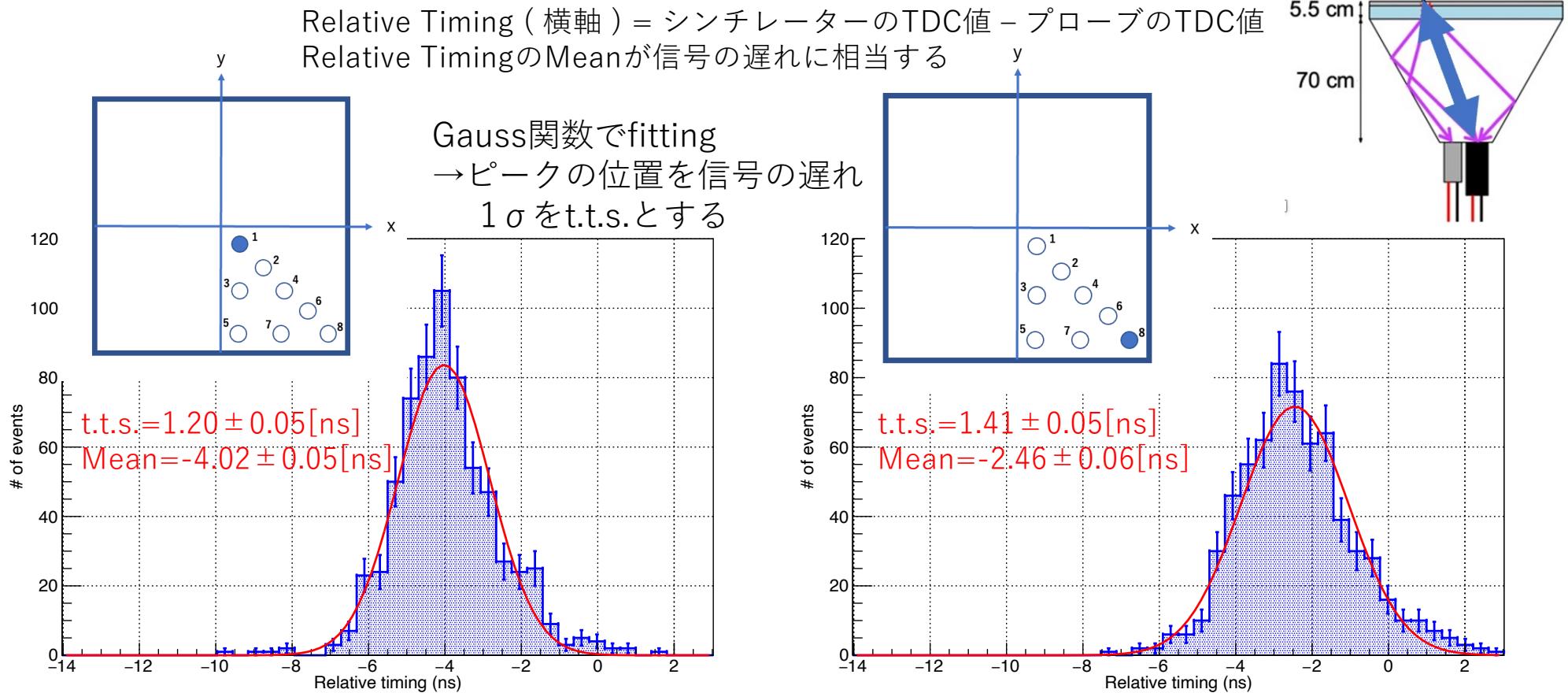
2枚のシンチレーターで、各8箇所測定

Fitting function:

$$-5.90 \left(\frac{x_{(cm)}}{50(cm)} \right)^2 + 34.4 \text{ (pC)}$$

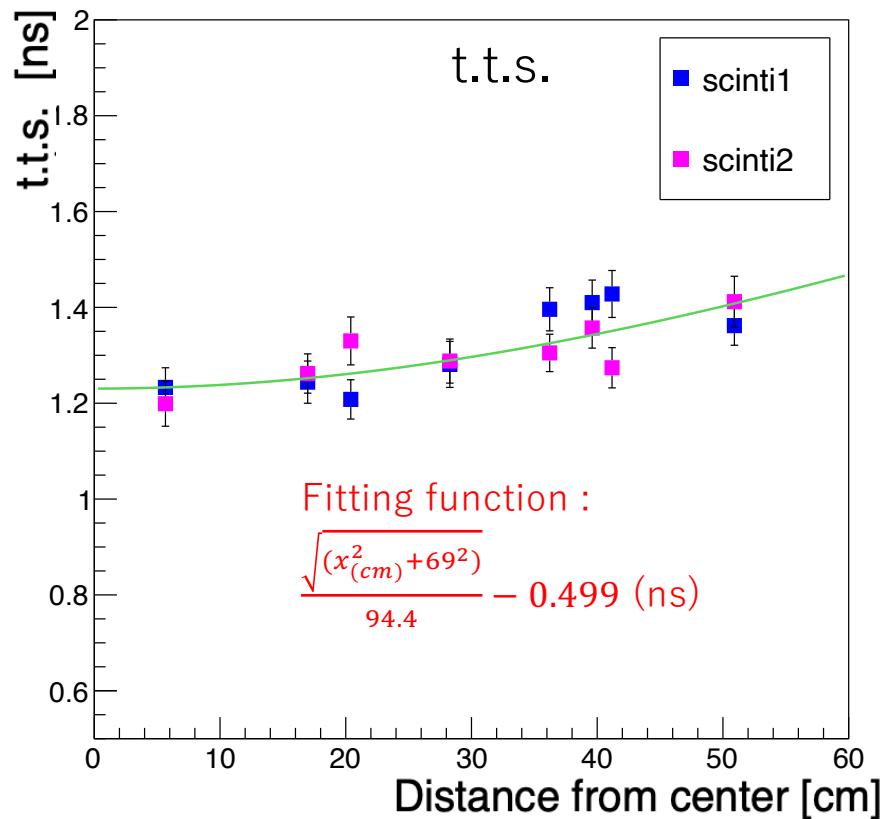
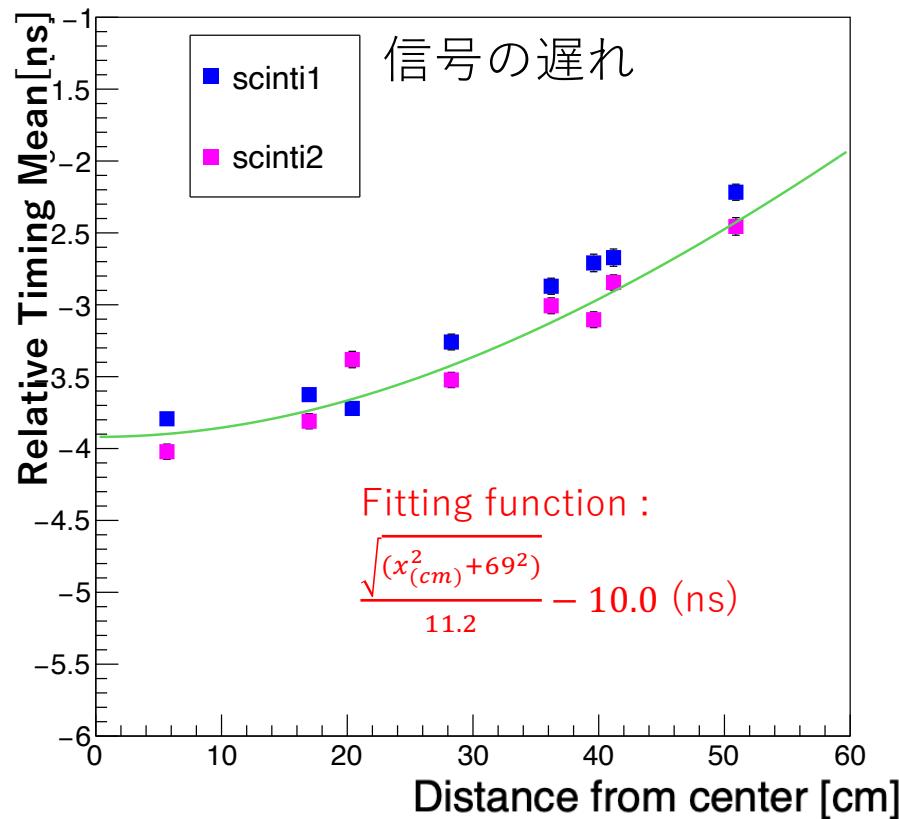
20%

各位置における信号タイミングの測定



8(角付近)の方が信号が遅れる
 8の方がt.t.s.が大きい

信号の遅れとt.t.s.の位置依存性



Fitting Resultsのまとめ

1. 電荷量 : $-5.90 \left(\frac{x(cm)}{50(cm)} \right)^2 + 34.4$ (pC)

2. 信号の遅れ : $\frac{\sqrt{(x_{(cm)}^2 + 69^2)}}{11.2} - 10.0$ (ns)

3. t.t.s.[ns] : $\frac{\sqrt{(x_{(cm)}^2 + 69^2)}}{94.4} - 0.499$ (ns)

これらの性能をMCに導入し、データとの比較を行った

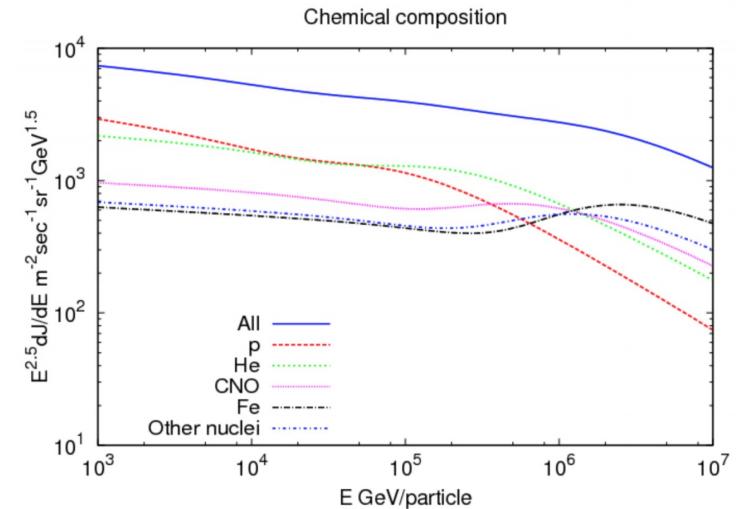
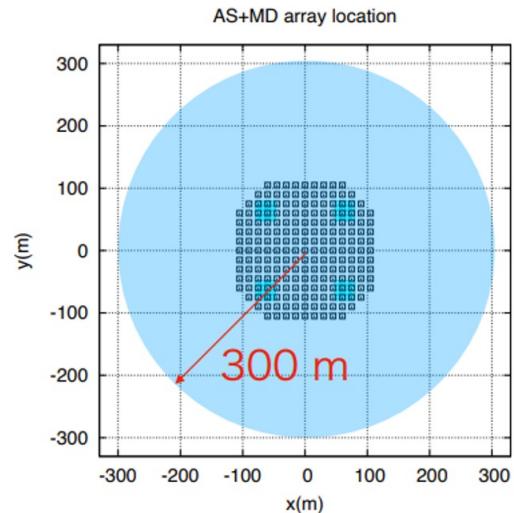
MC simulation & Reconstruction

1. 空気シャワー生成 : CORSIKA V7.6400 でコア位置はarray中心から300m以内
(相互作用モデル : EPOS-LHC、化学組成モデル : Shibata モデル)
2. 二次粒子を検出器応答シミュレーションに入力
: Geant4 10.04.p02 (5mm鉛 + 1mmステンレス + 50mmシンチレーター)

3. Energy deposit に位置依存性を考慮してPMT出力電荷量
に変換
4. 各検出器で二次粒子を検出したタイミングにt.t.s.と
信号の遅れを考慮

→今回測定したシンチレーターの特性を導入

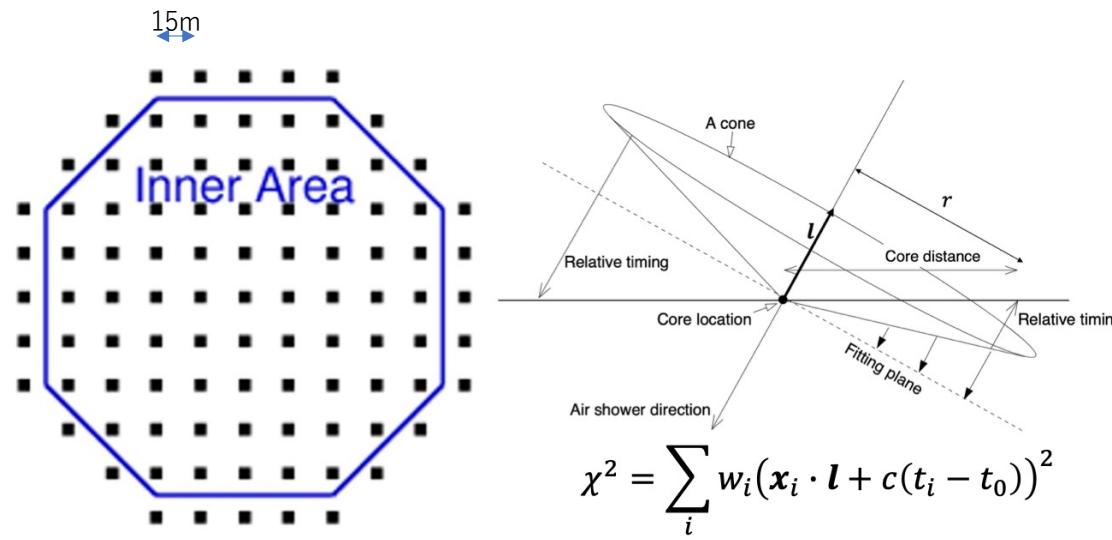
5. 出力をADC, TDC値に直して再構成プログラムに通す



M. Shibata et al, ApJ, 716, 1076 (2016)

Reconstruction後のEvent selection

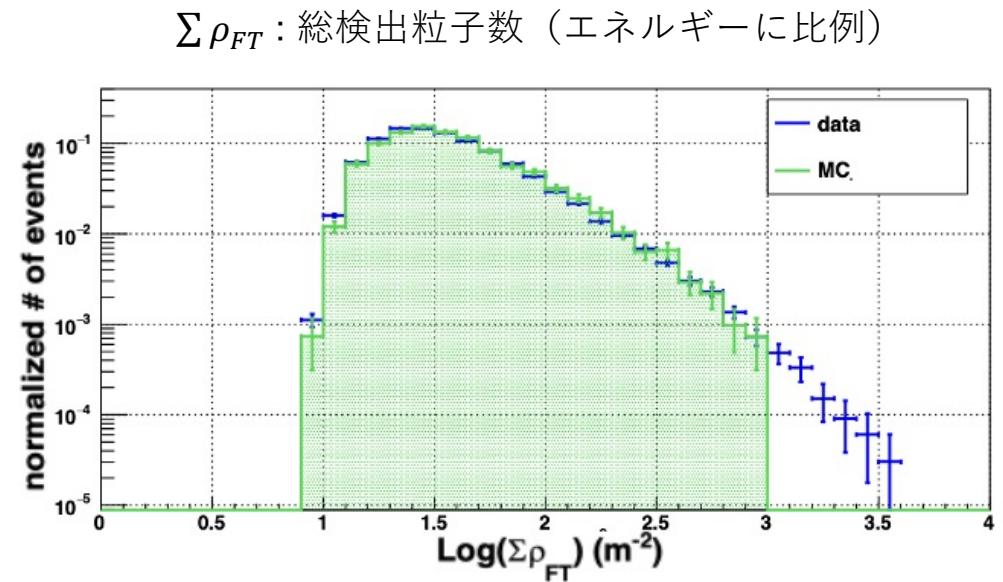
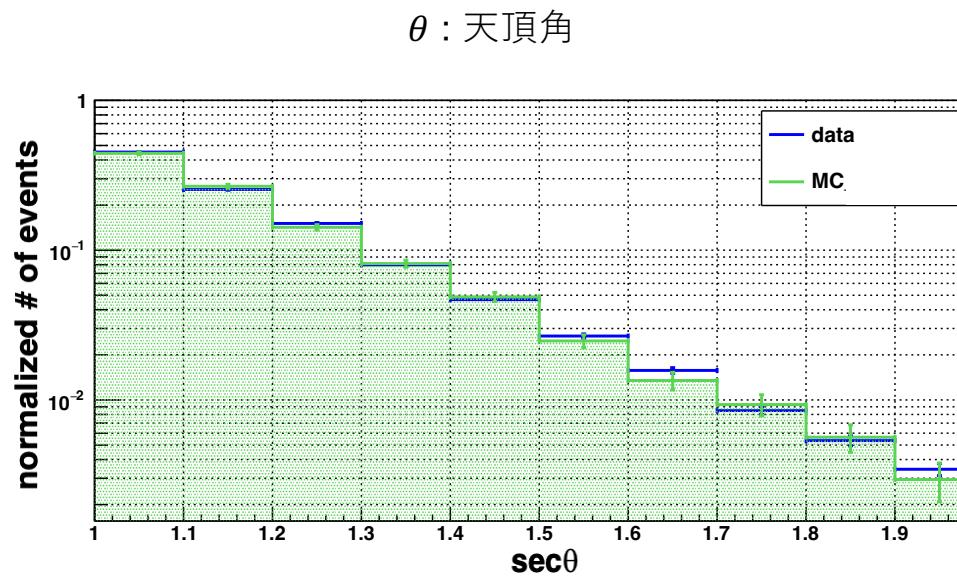
- ・最も多く粒子を検出した3台のうち2台はInner area
- ・空気シャワーフロントフィッティングの誤差残差 $\chi < 1.0\text{m}$
- ・1.25粒子以上検知した検出器が4台以上
- ・天頂角 $< 50^\circ$



Data/MC comparison of $\sec \theta$ and $\log(\sum \rho_{FT})$

Experimental data (2023/6/25, 20min) : 33093 events

Event selection後のMC event数 : 4078 events

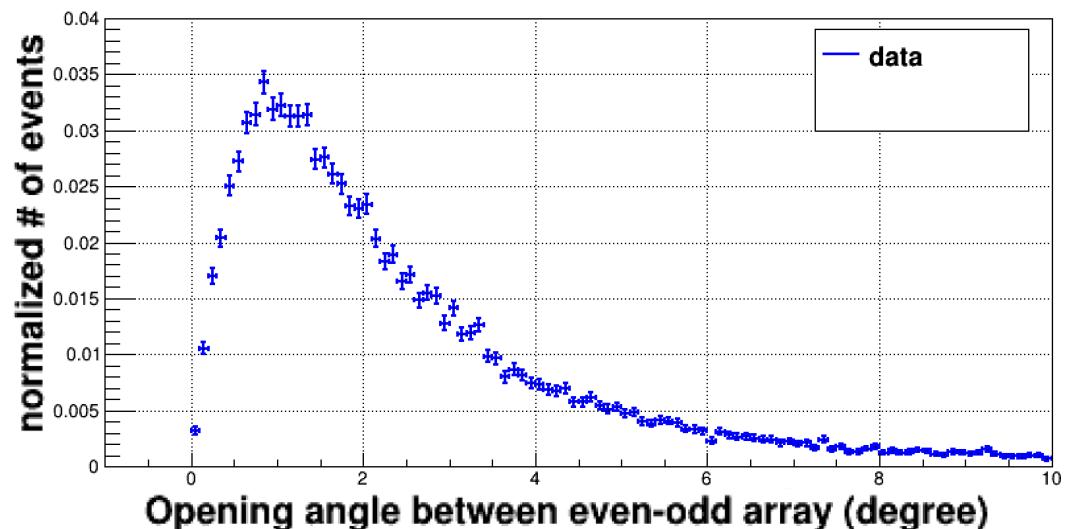
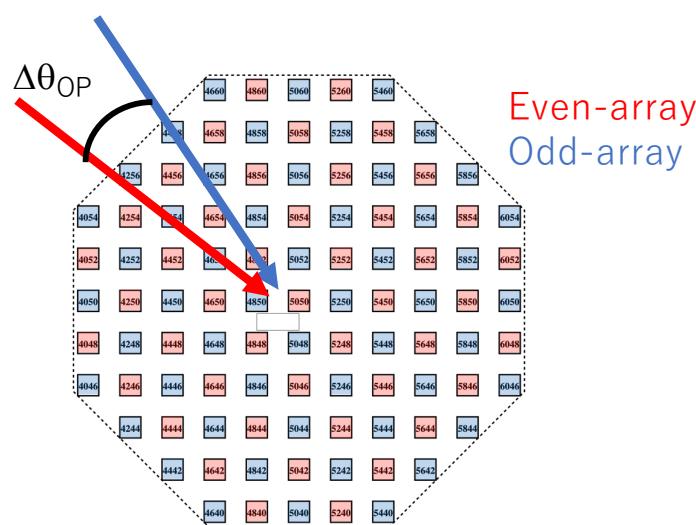


実験データとよく一致

Data/MC comparison of Even-Odd opening angle

→ 信号の遅れとt.t.s.の影響を受ける物理量

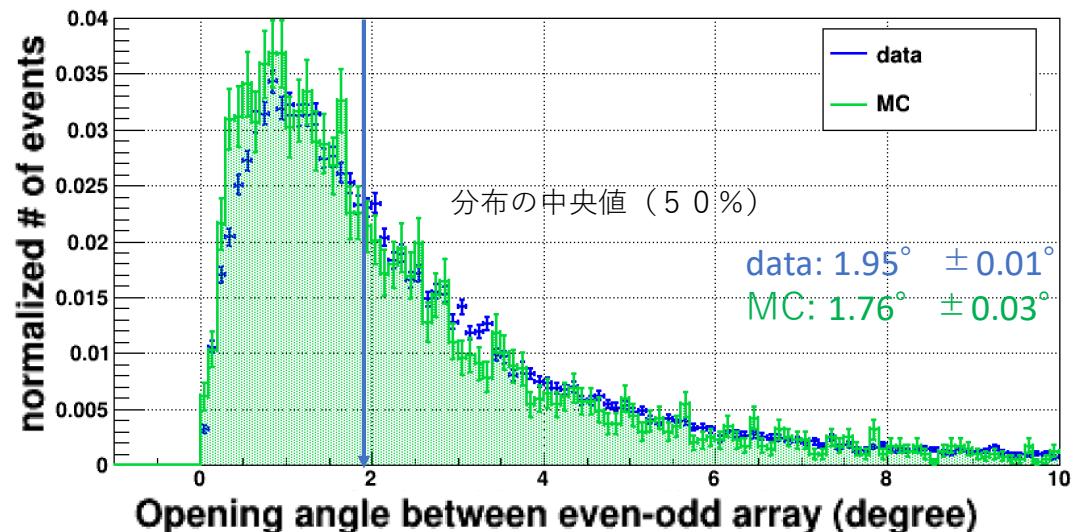
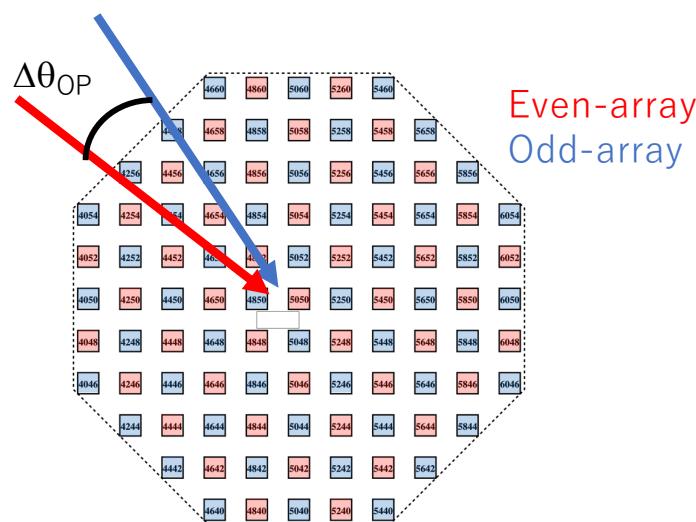
Even-Odd opening angle :
2つの独立したarray(even-array,
odd-array)により決定された方向
の開き角



Data/MC comparison of Even-Odd opening angle

→ 信号の遅れとt.t.s.の影響を受ける物理量

Even-Odd opening angle :
2つの独立したarray(even-array,
odd-array)により決定された方向
の開き角



分布は実験データとおおよそ一致

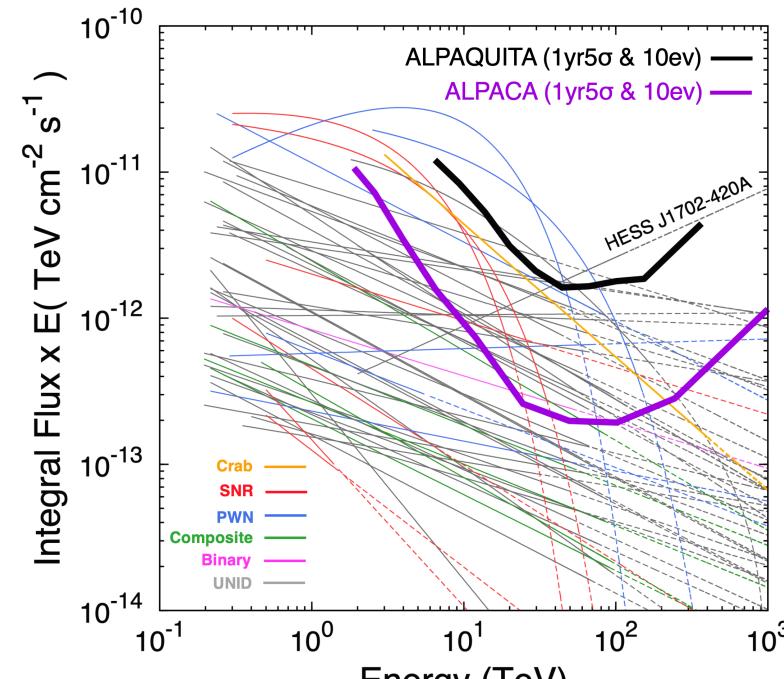
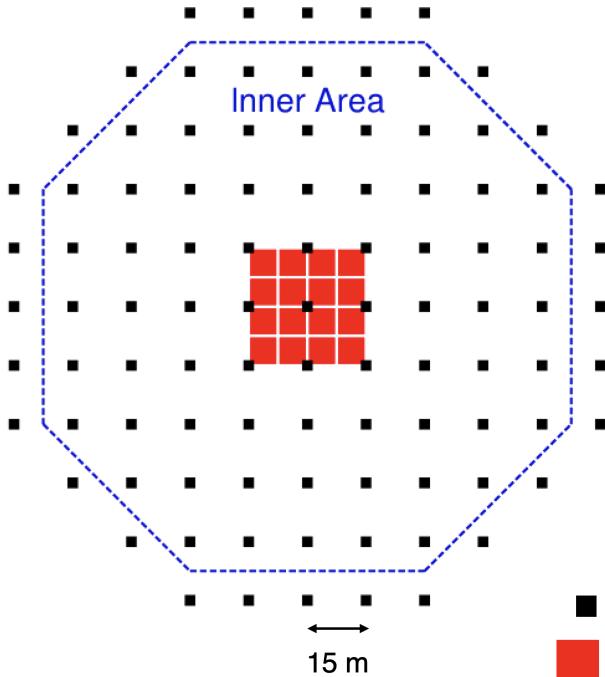
開き角の半分がおおよそ角度分解能
→角度分解能 ~1° (5-10TeV)

Summary & Next step

- ✓ ALPAQUITA実験で用いるシンチレーターの発光量（電荷量）・信号の遅れ・t.t.s.の位置依存性を測定し、MCに適用した
- ✓ DataとMCで天頂角分布・ $\text{Sum } \rho$ 分布・Even-oddの分布を比較した
->よく一致した
- ✓ シンチレーターの個体差を調べる
- ✓ MCのデータ量を増やす

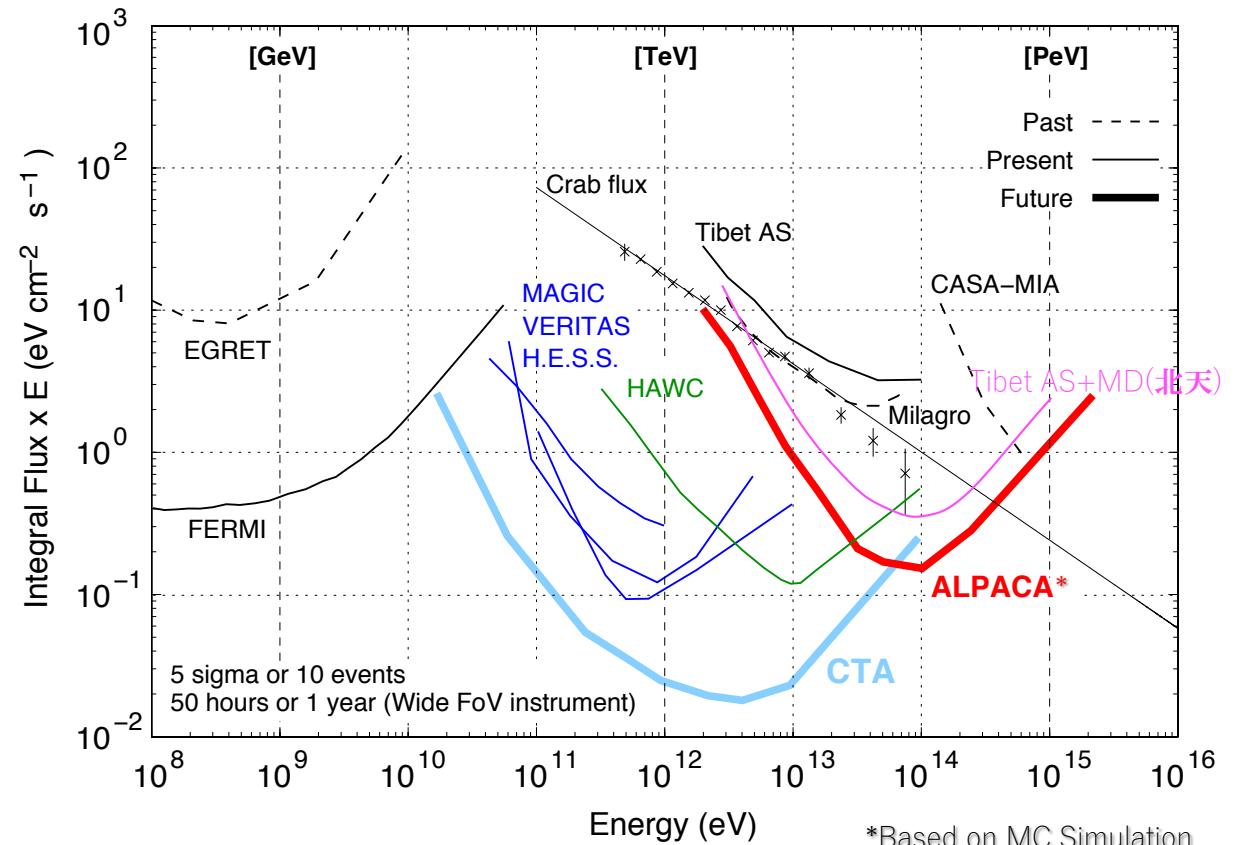
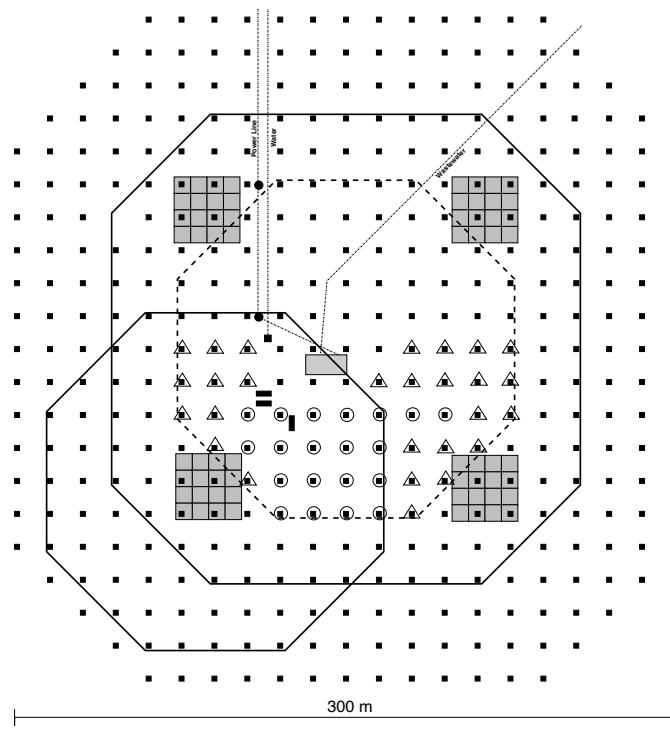
Back up

ALPAQUITA実験 感度



Kato et al (ALPACA Collab.), 52, 85 (2021)

ALPACA実験 感度



*Based on MC Simulation
For the Tibet AS+MD
22

